



高島亀太郎について

松山大学 川東 輝弘

私はこの数年、愛媛県の宇和島市の旧家から発見され、松山大学に寄託された高島亀太郎（1883～1972）の資料および日記の共同研究、ならびに日記の復刻、脚注に取り組んでいます。これまでに、亀太郎日記の1～4巻（明治30年～昭和7年）を松山大学の総合研究所から刊行し、それをもとに、地元の愛媛新聞社から、川東輝弘他編『高島亀太郎日記 1～4巻』1999-2002年を出版しました。

高島亀太郎といっても殆どの方がご存じないと思いますので、少し亀太郎の生涯について紹介します。

亀太郎は、明治16年（1883）2月、愛媛県北宇和郡宇和島町裡町4丁目（現宇和島市）に、商家（小間物商・生糸商）の長男として生まれ、26年3月に宇和島尋常小学校を、30年3月に高等小学校をいずれも首席で卒業しています。学業は大変優秀でしたが、商家の跡継ぎに学問は要らないという、父の頑強な反対で、進学出来ず、卒

業と同時に家業の生糸商を手伝わされます。家業の主要業務は、製糸家から生糸を仕入れ、人を雇って捻糸を行い、括造をして、京都の西陣等に出荷することです。厳しい父の下で、徹底的にこき使われました。明治37年9月、父が40歳の若さで亡くなり、21歳の亀太郎が家督を相続し、家業を継ぎ、また母や弟妹達の生活をみることになり、必死で働き、家業を守り、発展させ、宇和島でも一番の生糸商人になりました。

大正期に入ると、亀太郎は製糸業に乗り出します。大正4年（1915）6月から北宇和郡八幡村中間（カイダ）の地にて新しく製糸業を始めます。商人資本から産業資本への転換です。高島製糸場は当初は50釜で出発し、6年には70釜、10年には100釜へと着実に規模拡大し、また、技術革新もはかり、12年には大正式煮繭器、沈繰用繰糸機を導入し、煮繰分業を行い、また、繰糸法も沈繰を採用します。

昭和期に入ると、亀太郎はさらに技術革新を行い、昭和3年千葉式煮繭器、半沈繰用繰糸機を導入し、新工場を設立し、4年から繭の特約取引も始めます。昭和恐慌下、同僚の製糸家が次々と倒産していくなかでも技術革新をはかり、昭和8年には小岩井式多条繰糸機を導入し、2つ目の新工場

も立ち上げ、宇和島でトップクラスの製糸家に成長していています。また、製糸業界の公的分野でも活動し、昭和2年に愛媛県製糸業同業組合の第三区の支部長に、さらに7年には愛媛県製糸業組合長に就任し、名実共に愛媛のリーダーとして働いています。しかし、昭和恐慌から戦時体制下、製糸業界は不振・苦境の真っ只中にあり、生糸輸出は激減し、製糸業は企業整備の対象とされます。高島製糸でも欠損が続き、亀太郎は遂に昭和16年2月廃業を決断し、7月郡是製糸に工場を売却し、製糸業に終止符を打っています。ただ、亀太郎は根っからの実業家で、製糸業廃業後は、海運・木工・貸家・山林・不動産業等に各種事業に乗り出しています。

亀太郎は実業の傍ら、政治に早くから関心を持ち、政治活動を行い、また自ら議員になっています。明治44年1月、27歳で宇和島町会議員に初当選し、以後再選を重ねます。大正8年9月には国民党から県会議員に初当選し（後に、政友会に入る）、こちらも再選を重ねます（～昭和6年9月）。また、大正10年からは宇和島市誕生と共に市会議員になり、再選を重ね、宇和島政界の中心人物になります。そして、昭和12年には政友会から衆議院議員に当選（～20年まで、2期8年）、さらに、14年には政友・民政両派から推されて、宇和島市長（～17年）にも当選し、代議士と宇和島市長を兼務し、それこそ多忙な政治人生を送ります。亀太郎は石橋を叩いてわたる政治家で、選挙ではほとんど負け知らずであり、また、小さい体でしたが、大変行動的でした。

亀太郎の政治的立場は、若い頃は反政友

会の憲政本党系（旧進歩党系）、愛媛進歩党系で、普選論・政界革新派でならした国民党の闘士村松恒一郎を支持し、行動を共にしていましたが、県議になってからは、政友会入りし、山村豊次郎（初代宇和島市長、宇和島政界の中心人物、政友会）の後継者となり、以降一貫して保守本流の道を歩みます。戦中は翼賛議員・市長として戦争に協力し、戦後は戦争責任を問われ公職追放されます。しかし、51年に追放解除となり、活動を再開し、自らは議員にはならなかったものの、引き続き宇和島の政界で活動し、身代わりに甥の中村純一を宇和島市長に推したり、また、各種の選挙を陣頭指揮するなど、最後まで、保守本流の政治活動を行い、生涯をまっとうしています。

亀太郎の本領は実業家であり、政治家ですが、若い時からキリスト教の洗礼を受け、宇和島の教会活動に尽力していました。また、俳句をよくし、句集も出し、弟が挿絵画家の高島華宵であり、援助をするなど、文化人でもありました。

以上、少し長くなりましたが、亀太郎の人生を辿ると、ごく普通の一庶民・青年が他人に負けじと刻苦勉勵努力し、それぞれエネルギーに家業に政治に、あらゆることに働き回り、遂に地方の名士（衆議院議員、市長）にまで登り詰めるという出世物語として描けます。亀太郎のような人間はどの時代、どの地域にも必ずいるでしょうが、ただ、彼が偉い点は、資料を残し、膨大な日記を付けていたこと、つまり、人生の記録を残していたことです。そしてその日記には数千人もの人物（政治家・実業家、普通の人達）が登場し、地域社会の生きた記録となっていることです。記録が残

っていないと、いかなる人物も確実に時と共に忘却され、埋もれていきます。また、地域社会の歴史も種々の人物が登場し、交遊関係・対立関係がわかってこそ、生き生きと活写できます。その意味で、亀太郎の残した日記は、彼の人生の記録のみならず、宇和島の地域社会を理解する上で、貴重な価値ある歴史的記録だと思います。もし、関心のある方は是非、お読み頂きたい。



新刊紹介

渡辺尚志・五味文彦編

『新体系日本史3 土地所有史』山川出版社、2002年

東京大学 名武なつ紀

1. 編集方針

本書は、山川出版社から現在刊行中の、『新体系日本史』シリーズ第3巻である。同シリーズの特徴のひとつは、テーマ別通史—それぞれのテーマごとに、古代から現代までの展開を通史的に叙述し、1巻にまとめる—という編集スタイルにある。そのうち本書は、「人と自然、および人と人が取り結ぶ諸関係のなかでももっとも基本的かつ重要なものの一つ」(序文より)である土地所有(関係)をテーマとしている。19名の執筆者による、500ページを超える共著であり、執筆者ごとに対象としている時代や地域は異なるが、視点の共有化

が図られているため、統一感を保ちつつ読み進めることができる。

2. 各時期のキーワード

—要約に代えて—

- I 古代 首長的土地所有とそれを土台とした国家的土地所有
- II 中世 私的土地所有の成立、しかし形態は多様で幅輻的
- III 近世 領主—農民の重層的な土地所有
- IV 近代・現代 自由で排他的な近代的土地所有

3. 感想

○ 土地所有の通史

—読後、リアリティに満ちた歴史書であるという感想をもった。

いうまでもなく、農耕社会においては、土地は食糧生産に直結しており、その重要性ゆえに、土地をめぐる、古代以来、権力と民衆の、また民衆内部でのせめぎ合いが繰り返されてきた。土地所有をテーマとした通史、という試みによって各時代の象徴的かつ本質的な利害のありようが、生き生きとした姿で、また時代相互の関連性が示されつつ、映し出されている。

○ 土地所有の根拠

とりわけ興味深かったのは、土地所有が何によって認定されるか、という点に関する叙述である。

古代編では、国家的土地所有が崩壊し、墾田を鍵として私的土地所有が成立してくる際に、その指標は、① 自ら開発し、② 現実に利用し、③ 子孫に相伝

していくことであったと述べられている。こうした側面は、戦乱などにより所有関係を支える統一的な秩序が欠けていた中世においても、存在していたことが指摘されている。さらに近代以降、地租改正や憲法により、いわば「上から」与えられた近代的土地所有制度と、地主小作関係の拡大の下でも、在村の農民においては、「土地を耕作しているものがその土地に対してなんらかの権利をもちうる」という観念が、連綿と保持されていたとされる。

本書は、制度ではなく、むしろ実態・意識・慣行を描き出すことに重点を置いており、その古代以来の変遷について、考える機会となった。

○ 都市社会と土地

現在、日本における土地問題は、都市の土地問題として了解されている。もちろん、古代以来、権力の所在地をはじめとして、都市的な場は存在しており、本書の中世編や近世編においても、都市史研究の蓄積を反映して、商工業者による都市的土地所有が取り上げられている。しかしながら、高度成長期以降の質的な転換は、都市人口が農村人口を上回ったことにより、都市が住民の大部分の生活の場として、新たな社会的意味合いを持つようになったことである。

中世や近世においても広範に形成された、生産の場としての都市的土地所有とは異なった、生活の場としての都市的土地所有が、今後の都市社会の変化とかわかって、いかなる展開をたどるのか、本書に続編があるとすれば、それが中心的な論点になるだろう。

(追記) 筆者は、近現代の都市部における土地所有構造分析を研究課題としており、本書に「都市の土地所有 ー明治維新から戦後改革まで」と題して、数ページのコラムを執筆した。自身が関わった本を取り上げるのには、躊躇もあったが、本書の大部分は出版後の初見であり、また、比較的親しみやすいテーマでもあることから、紹介させていただいた。



2002 年度社会経済史学会中国四国部会大会のご案内

開催場所 山口大学

開催日 2002年11月2日(土)、
3日(日)

第1日目は自由論題報告、第2日目はシンポジウム「近代移行期における技術導入と資本蓄積」(仮題)を予定しています。是非、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

大会プログラムは、後日、発送いたします。

2002 年度山口大会報告者募集

上記の日程で、中国四国部会の大会を開催します。自由論題報告をご希望の方は、事務局まで報告テーマ、氏名、所属を、同封の葉書か払込用紙にご記入の上お申し込み下さい。またメールによる申し込みも受け付けています。メールアドレスは、ページ最後の事務局欄に示しております。申し込み締切日は8月20日(火)です。

中国四国部会会費納入のお願い

今年度の部会年会費 1,000 円の納入をお願い申し上げます。過年度分未納の方は、ご協力をお願いいたします。

会員近況報告について

2000-2002 年度における会員諸氏の研究活動状況を、次号(23号)に紹介したいと思っております。著書、論文、学会発表、講演、史料(資料)調査など、研究活動をご連絡下さい。

— 編集後記 —

そろそろ前期も終りに近づき、これから自分の仕事が出来ると思われている方も

少なくないと思います。夏休み直前になると机の前のカレンダーに目をやってみると残り何日、この講義は、残り何回と、ついついカウントしてしまいます。前期、休講にすることなく授業日程をこなせそうなことに、正直なところ、ほっとしています。

さてこの会報第22号は、川東崋弘先生と名武なつ紀先生に原稿をお願いしました。川東崋弘先生には愛媛の実業家・政治家である高島亀太郎について書いていただきました。『高島亀太郎日記』の第4巻は、今年5月に愛媛新聞社から出版されています。名武なつ紀先生には、今年3月に山川出版社から刊行されました『土地所有史』について紹介をしていただきました。皆様、是非、ご一読下さい。

(平田 桂一)

社会経済史学会中国四国部会事務局

〒 790-8578 松山市文京町4-2

松山大学経営学部内

平田桂一研究室

e-mail : hiratak@cc.matsuyama-u.ac.jp

電話 : 089-925-7111 (代)

会費振替口座

郵便振替番号 01670-9-61454

加入者名 社会経済史学会中国四国部会